



カメラマン物語

第4話

竜次テストを受ける

竜次 テストを受ける

荒木又二郎と結城竜次

得体の知れない中年カメラマンと、何も知らない20歳のアシスタント。

よく分らないコンビだ。

初対面でアシスタントをしろと言うのも乱暴だ。

みんなの話しじゃ、有名なカメラマンは、アシスタントを選ぶのも気難しいと聞いている。

竜次は不安だらけである。

しかし竜次にしてみれば、かなりラッキーだ。

それに又二郎に何か魅力を感じていた。

昨日あったばかりなのだが、不思議な大きさを感じていた。

「自由」の風を身にまとっているようだ。

そして「写真は楽しい」という言葉に、共感出来た。

「楽しい」という言葉は、単純な意味ではないと思うけど、そうあって欲しいと心の中で思っているのだ。

又二郎についてよくは知らないが、ちゃんとしたプロのカメラマンということはわかる。長い髪に無精髭。顔立ちは渋い。皮のジャケットがガッチリした体型によく似合う。年齢は50歳前後位か。

ドラマの中に出てくるカメラマンそのものだ。

事件に巻き込まれ、ドラマのキーポイントになる役だ。

それに比べて日景先生もプロカメラマンだが、日景先生は暗いというか、真面目すぎて堅苦しいのだ。

僕的美穂ちゃんへの思いなど、全く分らない唐変木なのだ。

二人は駅に向かって歩いている。

竜次はカメラバックの重さに、足取りが怪しい。

そんな竜次にお構いなく、スタスタと又二郎は歩く。

「先生、何処に行くんですか？」

又二郎に遅れないように、踏ん張って歩く竜次は尋ねた。

「今日は高尾山だ」

後ろを振り向かずに素っ気なく話す。

「えっ。山に行くんですか」

「山と言っても山の上じゃない。廃校だ」

「廃校って、学校のことですか。そこで女性を撮るんですか？」

又二郎は振り返り

「うるさい奴だな。黙ってついてこい」と吐き捨てる。

竜次は黙り込んだ。

新宿駅の近くで、携帯電話を取り出し電話をかける。

5分後に軽のワゴン車がやって来た。

「お待たせしました。予算の関係でこの車です」

ワゴン車から降りたのは、スーツ姿のサラリーマンだ。

「おう、高橋君、済まん。おい竜次、荷物を詰め込め」

後ろのドアを開けると、荷物と言うか機材がギッシリ入っている。

竜次はその隙間に自分たちの荷物を詰め込む。

「君、運転頼むね」

竜次は原付以外の免許を持っていなかった。

「すみません。普通免許持ってないんです」

「えーっ、アシスタントなのに免許を持ってない人を始めて見たよ」

高橋は本当に驚いていた。

「高橋君、すまん」

又二郎は後部座席にサッサとすわりながら謝る。

「わかりました。今日は僕が運転手をします」

竜次は、高橋の顔をチラリと見る。

怒っている顔には見えない。

ホッとする。

車が勢いよくスタートする。

「高尾方面ですよ。しかし久しぶりですよ。荒木先生」

「そうだな」

「何処へ行ってたんですか」

「ヨーロッパだよ」

「凄いですね。撮影旅行ですか」

「そんなんじゃねえよ」

「いやー。しかし業界じゃ、死亡説が流れていたんですよ。荒木先生の事だから、やばい事に引き込まれて殺されたって」

又二郎は苦笑いをする。

「俺がそう簡単に死ぬかよ」

「そうですよね。ところで、今日の撮影機材ですが、言われた通りレンタルして来ました。カメラはハッセルブラッド、レンズはディスタゴン40ミリとゾナー250ミリ、三脚はジッツオがなかったのでハスキーにしました。フィルムはコダックのEPRですが、5年前に製造中止になっていますので、やっぱり有りませんでした」

「そうか、コダックも大変だなー」

「ストロボは充電式の1200を2台、カサバン4灯セット。コメントでいいですよ」

「ああ、いいよ」

「しかし、フィルムの撮影は今回限りにして下さい。用意するのが大変なんです。印刷の都合も有りますから。今はほとんどデジタルです。ハッセルを使うならデジタルパックも有りますから」

「そうだな。迷惑をかけた」

助手席に座って黙っていた竜次に、高橋は声をかけた。

「先生のアシスタントだよ」

高橋はグレーのスリムスーツを着ている。

端正な顔立ちと刈り上げた短髪が、生真面目に見えさせている。

頭も良さそうだ。

「はい、結城竜次と言います。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく。桃色社の編集の高橋です」

「あー、桃色社ですか」

桃色社は竜次も知っている。エロ本のトップメーカーだ。

この会社の雑誌は、コンビニの成人コーナーにいつも置いてある。

竜次も人の途切れたコンビニで、店員の目を気にしながら、エロ雑誌を見ることがあるが、パラパラと見ただけでも、かなり御下劣だ。あんな雑誌だから会社も変ってるのかなと思った。

「竜次君、桃色社の人間だつてごく普通の会社員なんだよ」

高橋は竜次の心を見透かしたように話す。

「いえいえ、僕は何も・・・」

「僕が桃色社と言うと、みんな君みたいな顔をするんだ」

鋭い観察力だ。

「桃色社がアダルト専門だからと言って、会社の人間がすべてエロいわけではないのさ」

「そうですよね」

「エロは人間の根源さ。エロは生殖の為にはなくてはならないんだ。日本国だつて、イザナミイザナギがHをしたから出来たつて、古事記に書いてある」

「古事記つて、日本で一番古い本ですよ」

竜次の日本史の知識は最低だ。

「エロにも色々ある。例えば古代ギリシャでは」

高橋は淡々と話し始めたのだが、又二郎が止めた。

「高橋君、もう止めときな。こいつに言っても無駄だよ」

「すみません。つい」

気を取り直したように、話の内容を変えた。

「又二郎先生のアシスタントなら、相当写真が出来るんでしょうね」

その質問には、又二郎が答えた。

「そいつとは、昨日あったばかりだ。エロい素人だよ。まだ役に立つかどうかもわからない馬の骨だ。ただ、俺は運命を信じるのさ。久しぶりに日本に帰ってみると、こいつがさ、ユリを撮

影してた。しかも鼻血を流して射精していた。面白いだろう」

「先生、その言い方はあんまりですよ」

竜次は顔が真っ赤になった。しかし本当の事なので反論の余地はない。

高橋は、くすくす笑った。

「そうですか。それじゃ、しっかり覚えて下さい」

竜次は、今のひどい紹介よりも、さっき話していたカメラ機材などの言葉と意味がまるっきりわからないことに不安を抱いた。

これがプロの世界だと感じた。

「あっ、モデルさんは現地で落ち合うんですか」

「知子には連絡をつけといた。妹が送ってくれるんだと」

「ああ、沢渡知子さんですか。まだモデルをやってたんですね。確か看護師になって引退したと聞いてますが」

「俺もそうだと思ったんだけど、久し振りに電話で聞いてみたら、ひどい結婚詐欺にひっかかって、看護学校に行くために貯めていた貯金を全部取られたらしい。俺が声をかけたら、もう一回モデルをやって金を貯めるらしい。だから日本での初仕事を彼女にお願いしたんだよ」

「そうなんですか。悪い奴がいるもんですね」

軽のワゴン車は住宅地を抜けて、山道に入った。

高橋は車のダッシュボードにスタンドを立て、スマホのカーナビアプリを立ち上げている。

「もうすぐつきますよ」

山道から農道に変わった。少し行くと民家が点在している地域に出た。

「あれですね」

道の先の方に学校らしき2階建ての木造が見えた。山里の古い小学校だ。

校舎の後ろに山がそびえている。しかし太陽はまだ高いのに、この場所には、生活音がしない。人も歩いていない。

「人がいないですね。無人の村ですか」

「ああ。ここはダムの底になる予定だった。所がいつの間にか工事は凍結になったようだ」

「それで」

「」

校門の前に女性が立っている。

沢渡知子さんのようだ。

美人だ。この人がヌードモデルとは思えない。

髪が長く、やや細い。しかし、胸も腰も大きい。

顔は品がいい。若尾文子さんのような正統派美形だ。

「先生、お久しぶり。前に一回ここで撮ったわね」

「覚えていたか。確かあの時はセーラー服だったな」

「荒木先生の担当をしたのは、あれが最初でした。ビックリしました。だってスカートの下には赤ふんどしをつけていたんですから」

「ああ、知子を選んだのは、知子は器械体操をやってたからだ」

「高校の時だけ。え一何をするの」

「跳び箱だ」

「まさか、素っ裸で跳び箱を飛ぶの？」

「その通り。大股を広げた瞬間をしたから撮る」

「キャー、下らない」

「バカ言え。下らないから良いんだ。なあ、高橋」

「良いですね。最近そんな写真を撮る奴がいなくて。やっぱり荒木先生ですね」

「まだアシスタントが素人だから使いものにならないいいんだ。高橋君、教えてやってくれ」

竜次は、申し訳なさそうに「お願いします」と言う。

「しょうがないな。早く覚えて下さいよ。さあこの荷物を静かにあの古い体育館に運んで！」

又二郎は小声で囁く。

「いいか、見つかるなよ」

「えー、許可とって無いんですか」

知子、高橋、竜次が声を揃えた。

「声大きい。小学校の体育館で、大股開きのエロ写真を撮るって行って、市の連中に言って許可が下りると思うか」

「わかりました」

みんなの返事は小さくなった。

「さあ、元気を出していこう」

又二郎が元気に言う。

「しーっ」

みんなが、又二郎を睨んだ。

高橋は手際が良かった。知子も手伝っている。

又二郎はテキパキと指示している。

竜次も言われるままに動く。

ストロボに傘をつけて、セットする。

知子さんも洋服を脱ぎスタンバイをしている。

高橋は、カメラバックから機械を手を持ち、セットした高い跳び箱のところに立つ。

「竜次。OKと言ったらストロボの赤いボタンを押せ」

又二郎の指示が飛ぶ。

「OK」

パコーン

ストロボが一斉に光る。

竜次はビックリする。

「F8です」

「もっと左」

「竜次、OK」

「はあ？」

「もう1回押せ」

「はい」

パコーン。ストロボが光る。

「F5.6」

何回か繰り返す。

又二郎が考え込む。

竜次は、高橋に近づき、こそっと聞いた。

「何をやってるんですか」

「えっ。これも知らないの。露出を測ってるんだよ」

「へー」と感心する竜次を、高橋は呆れた顔をした。

「良し」

又二郎は大きくかぶりを振って、カメラをセットする。

「いいぞ。知子、飛べ」

「はい」

知子は羽織っていたタオルを脱ぎ捨てた。

髪を後ろでまとめ、体操選手のように右手を上げる。

背筋がシッカリ伸びた知子のシルエットは、アスリートのように綺麗だ。

「行くわよ」

何度かその場でタイミングを取り、走り出す。

ロイター板を両足で踏む。

バーンと音がして、裸の知子が宙に舞う。

かなり高い。

手を跳び箱に着く。

両足が綺麗に開く。

その瞬間、パコーンとフラッシュが光る。

「いいぞ、丸見えだ。もう一回」

何度も繰り返す。

さらに平均台、マット体操、果ては新体操のリボン、ボールを使った演技。

古くて狭い木造の体育館は、不思議な撮影会場となっていた。

又二郎の動きは俊敏だ。

中年とは思えない。

そして、首からぶら下げているカメラを時々まで回しながら

「やっぱり良いカメラだな」

と独り言を言っている。

ハッセルブラッドはスウェーデンのカメラメーカーだ。

今回使っているカメラは500Cというタイプで名器である。

一眼レフだが、ブローニーというフィルムを使う。

35mmと違い、フォーカシングフードと呼ばれる蓋を跳ね上げ上からのぞき込む。

ファインダーは正方形で、写真は真四角に写る。

見え方は左右逆で、人が右に動くと、ファインダーの中では左に動いて見える。

このタイプは完全なマニュアル式で、ピントも露出も巻き上げも手動だ。

フィルムは12カットしか撮れないので、フィルムを入れているマガジンを複数持ち、12枚撮り終わったら、マガジンを変える。

中判カメラを撮影に使うと、独特のリズムが生れる。

ファインダーを覗き、ピントと絞りを確認しながらシャッターを押す。

シャッター音は独特だ。

カッシャという、レンズシャッターの軽い感じの音。

その後にフィルムを巻き上げるギアの音。

中腰でカメラを上からのぞき込む。

カメラマンはゆらゆらと動く。

12枚しか撮影できないので、連写はしない。

1枚1枚集中する。

回りにも緊張が伝わる。

いや、そんな雰囲気になるのだ。

3時間程で、撮影は終了した。

撤収が終わり、みんな集まった。

知子は、ミネラルウォーターをごくごく飲んでいる。

「お疲れ、竜次、どうだった？」

又二郎がタバコをふかしながら聞く。

「何が何だか分かりませんでした」

「そうだろうな。ほら」

そういつて、ポケットから1000円札を竜次に渡した。

「なんか買って来るんですか」

「それでもいいけど、これはお前のバイト代だ。チャンと領収書をくれよ」

「たった千円ですか」

「バカ言え、なんにも知らない素人にそんなに払えるか」

「はい」

竜次は黙り込んだ。

現代っ子の竜次だが、自分の不甲斐なさは身に浸みた。

写真の事を、本当に何にも知らなかったのだ。

役に立たないばかりか、足手まといだったのだ。

「知子、お疲れ。ギャラだ。今回は3万だ」

「有難う。はい、領収書。又お願いしますね」

軽く手を振ると、妹さんの車が迎えにきていた。

「さて帰ろうか。高橋君、アシスタント有難う」

「お疲れ様でした。さすがは又二郎先生。面白かったですよ」

「そうかい。俺も勘を取り戻したよ。けっこう撮ったな。高橋君、帰りに現像所へ寄ってくれ」

「了解しました。現像所なんか久しぶりに行きますね。先生は1本先に現像して、それを見て増減を指示するんでしたね」

「そうだ。しかし、もうデジタルにするよ。俺のわがままはこれで最後だよ」

「お願いします。会社の印刷システムがデジタルになってしまったんです」

又次郎は苦笑いをする。

「さあ、帰ろうか」

スタッフ3人は軽のバンに機材を詰め込んで、撮影現場を出発した。

車内で又二郎と高橋の世間話が一頻り済んだ時、竜次が恐る恐る聞いた。

「又二郎先生。今日はなぜフィルムを使ったのですか」

又二郎は静かに答えた。

「好きだからさ」

「デジタルの方が綺麗だと言うじゃ無いんですか」

「綺麗と言い切るには語弊があるな。どんなにデジタル化が進んでも、アナログの表現には勝てないんだ。竜次はパソコンは得意か？」

「一通りの事は出来ると思います」

「ふーん、一通りの事ね。画像処理を仕事にしたことがあるか。デザイナーとして仕事をしたことがあるかい？」

「仕事にしたことはないですけど、画像処理はフォトショップを使っていますし、デザインも、ワードでチラシを作ったことは有ります」

「ただのアマチュアか。そんな奴らばかりだな。デジタルって奴は味噌も糞も一緒になってしまう。俺はそこが嫌いなんだ」

「出来るかと言われたから、出来ることを言っただけです」

竜次の口は少しとんがっている。

「写真も出来ますなんていうんだろうな」

「まあ、プロと比べたらレベルは違いますが、写真部ですから」

「それじゃ、フィルムは撮れるかい？」

「やったこと有りませんが、シャッターを押せば撮れるんですよ。出来ると思います」

「ほー」

又二郎の顔色が陰しくなった。

高橋が空気を読んだ。

「竜次君。そこまでにしたらどうかね。写真の事を何にも知らない君が、フィルムを撮影出来るとプロの前で言い切るのは、あまりにも失礼じゃないかな」

「はあ」

竜次は、なぜそんな言われ方をされるのかが分からなかった。

「高橋君、もういいよ。こいつは写真が好きじゃ無いんだと思う。ただの目立ちたがりのスケベなんだ。今日の動きを見て分かっただろう」

「僕はスケベじゃありません」

「馬鹿野郎。男はみんなスケベなんだ」

「はあ」

高橋は真面目な顔をした。

「君はカメラマンになりたいと言ってたよね。この荒木又二郎先生のアシスタントになれるなんて、凄いことなんだよ」

「もういいよ。今日はテストのつもりだった。竜次君、アシスタントは今日限りだ」

「えー、首ですか」

竜次はがっくりとなった。

「まあな。俺のアシスタントをするのはまだ早いようだ」

「それはわかります。でも僕は一生懸命やりました」

「だから？」

「えー、一生懸命やったのに、クビなんて」

「一生懸命だったら、下手でも許されるのかな」

「ああ、そう言うわけでは無いですけど」

竜次は黙り込んだ。

又二郎の声のトーンが低くなった。

「竜次。お前を突然アシスタントにしたのは、お前が何も知らないからだ。何も知らないのにカメラマンになりたいって言う、子供みたいな言い方が気に入ったのだ。最近は何口な奴が多くて、バカが少なくなった。そのバカさがお前の取り柄なんだよ」

竜次は誉められているのか、けなされているのか分からなくて黙っている

「ただ、やはりそれだけでは駄目なんだ。もっと必要なものがたくさんある。

お前は、それを自分で身につけなくては駄目だ」

竜次は聞く。

「僕に必要なものとは何ですか」

「それは、お前が探し出せ。あっ、そうだ。本を読め」

「本ですか」

又二郎はカバンの中をのぞき込み、一冊の単行本を取り出した。

「ほら」

竜次に投げてよこす。

竜次はその本のタイトルを読む。

竜馬がいくとある。

「この本ですか。坂本竜馬の本ですよ。何年か前にNHKの大河ドラマになった奴ですよ」

高橋がにやりとする。

「良い本ですよ。今の竜次君にぴったりかも」

「そうだ。お前の名前にも竜の文字が入っている。この本は俺が学生の時に読んだ本だ。今でも時々読み返すんだ」

「これって小説じゃないですか。それも歴史物でしょ。これを読んでも写真のことは勉強できないと思いますけど」

竜次は不満げだ。

「技術というのは、努力すれば上達する。だけど大切なのはここだ」

又二郎は頭と胸をたたく。

「いいか、これは本当のことなんだ」

竜次は黙り込む。

高橋が話す。

「竜次君。先生の言うことは本当だよ」

高橋も竜次を援護しない。

「わかりました」

がくりと肩を落とす。

「だけど一つだけ俺のアシスタントになれるチャンスをやろう。写真を1枚持ってこい」

「写真ですか？」

「そうだ。俺が納得できる写真をだ。とれた時でいい」

「本当ですか」

「本当だ。嘘は言わん。高橋君が証人だ」

「わかりました。証人になりましょう。竜次君頑張れよ」

突然の展開に、竜次は戸惑ったが、この先生のアシスタントになったら、いろんな事を覚えられるかもしれない。もしかしたら本当にプロになれるかも知れない。

そんな予感がした。

「そういえば、お前には写真の先生がいるって言ってたな」

「はい。大学の先生です。日景先生と言います」

「日景って、日景陽介のことか」

「荒木先生、知ってるんですか」

荒木は、不思議そうな顔をする。

「竜次。お前は本当にラッキーな奴だな。その運を活かせる男になればいいのにな」

「日景先生って、有名なんですか」

荒木は、黙っている。

何かを知ってる顔だ。

「その内わかるよ。さあ、新宿についた」

「竜次君、頑張ってみなよ」

高橋も声をかける。

「わかりました。必ず写真を持ってきます」

竜次は、新宿駅に向かう。

プロの現場で働いたことで、激しい高揚感がある。

アドレナリンが体に満ちている。

自分の中で、何かが目覚めたような気がした。

右手の1冊の本。

今まで、漫画しか読んだことがなかった。

「ふーん、竜馬がいくか」

この本が、竜次の運命を変えるようになる。

「読んでみるか」

そう独り言を言って、帰路についた。